

令和7年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和7年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、2～4学年が目標を上回っているが、5・6年生が目標を下回る結果となった。中学年は「漢字を書くこと」にやや課題が、高学年は思考力・判断力・表現力を問う問題に課題が見られた。説明文の内容を読み取ったり、調べたことをもとに文章を書いたりする活動を日常的に取り入れることや、学習した漢字を普段から活用していく習慣を付けること等、低学年のうちから取り組ませていく。
社会	学校全体（5、6年）の社会の正答率は、全ての学年が目標値を下回っている。知識の定着に課題が見られるため、学習後に復習を十分に行い、知識・技能の定着を図っていく。その上で、資料を読み取り活用する力もつけさせたい。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、1～5学年が目標値を少し上回ったが、6学年は下回った。既習事項の確実な定着を図り、基礎・基本の力を培っていくと共に、基礎・基本を活用して考える問題にも積極的に取り組ませていく。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が目標値と同等か、もしくはそれを下回っている。各学年において、基礎・基本の定着を図りつつ、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。
外国語	外国語の正答率は、目標値よりわずかだが下回っている。「アルファベットの書き」に苦手意識をもつ児童が増えている傾向にあるため、英語を書く活動を意識的に取り入れ、慣れ親しめるよう授業の改善を行っていく。

本校の教育目標
◎よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・生きて働く「知識及び技能」の習得 ・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成 ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・国語科における、言語活動（話す・聞く）を充実させるための工夫を通し、児童の主体性を育むことを目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観-ブロック会での事後検討を通して- ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（3年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の正答率は、区の目標値67.5％に対して75.0％と7ポイント以上、上回る結果となった。基礎は、5.9ポイント、活用は10.7ポイント上回った。しかし、領域別にみると情報の扱いに関する事項が区の目標値より4.6ポイント下回り、つまずきが見られる。また、問題の内容別に見ると、漢字を書くことにおいて区の目標値と同等の正答率であった。この2点については丁寧に指導していく必要がある。	新出漢字200字、既習漢字240字を正しく読み書きできているか、単元末のテストで確認する。定着を図るために、学習タイムや家庭学習で繰り返し取り組ませる。また、説明文の読み取りを通して、共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係についてワークシートを活用して整理する方法を指導していく。児童が抵抗なく取り組めるよう計画的に授業で扱っていく。	学習の中で対話を取り入れる。自分の考えと相手の考えを比べながら、聞いたり、伝えたりできるようにする。また、語彙を増やすために国語辞典を活用したり、様々なジャンルの本に触れられるよう、読書活動を充実させる。
社会	自分たちの住む「北区」について学習し、生活に身近な単元が多いことから、教材との出会いである導入に重点をおく。また、できるだけ体験活動を取り入れ、気付きや疑問をもち、課題解決をしていこうとする意識を育てていく。学習した「社会の言葉」や方位を十分に活用できていない児童が多いため、学習したことを生活に生かせる指導の工夫が必要である。	資料からの読み取りや、地図帳の見方、地図記号など基礎な内容は、ゲーム性のある活動を取り入れながら楽しく学習していく。学習問題作りや学習計画の立て方は児童の思いを引き出しながら丁寧に扱うことで、課題解決の意欲につなげていく。学習したことをまとめる活動では、友達や保護者、下級生に伝える場面を設定し、「社会の言葉」や学んだことを意図的に活用させていく。	ICTや図書（図鑑や年鑑）資料、動画視聴などを活用して、教科書の資料の補充を行う。疑問や気付きをペアやグループで話し合わせる活動を取り入れる。様々な思考ツールを取り入れる。新聞づくりやポスターセッション、ICTなど多様なまとめ方を経験させる。
算数	全体の平均正答率は、区の目標値に74.0％に対して、79.6％と5.6ポイント上回る結果となった。基礎は、4.3ポイント、活用は10.9ポイント上回った。問題の内容正答率を見ても、8つの全てで、区の平均を上回った。しかし、「はこの形」の問題については、誤答、無答の児童が5割程度いることから、立体図形の構成要素について復習していく必要がある。	全体の平均正答率は、区の目標値に74.0％に対して、79.6％と5.6ポイント上回る結果となった。基礎は、4.3ポイント、活用は10.9ポイント上回った。問題の内容正答率を見ても、8つの全てで、区の平均を上回った。しかし、「はこの形」の問題については、誤答、無答の児童が5割程度いることから、立体図形の構成要素について復習していく必要がある。	自力解決や比較検討の時間を十分に確保し、多様な物の見方・考え方ができるようになること、既習事項を用いて問題解決をしていくことを指導する。苦手意識のある児童へヒントカードを準備し個に応じた手立てを講じる。学習タイムでは、プリント学習だけでなく、きたコンを活用し、練習問題・発展問題に取り組ませる。
理科	2年生までの生活科で培ってきたことや、自分たちの生活経験をもとに問題設定を行う。観察や実験などを踏まえ、共通点や差違点を話し合わせ、結果のまとめにつなげていく。「昆虫の体のつくり」「植物の体のつくり」の単元において、部位の正確な名前や位置を覚えていない児童が2割程度いる。写真や実物を用いて、正確に「理科の言葉」を習得させる。	観察単元の多い学年であるため、観察対象である動植物を実際に育てる活動を取り入れる。花壇や教室での飼育や栽培環境を整え、いつでも児童が世話をしたり観察したりできるようにする。	ICTを活用した観察や実験を取り入れ、共通点や差違点に気付けるようにする。また、観察や実験の視点を与え、考察やまとめを自分で考えてできるように指導していく。